

主 題：霊的リーダーのあるべき姿
聖書箇所：テモテへの手紙第一 3章1節

今朝、皆さんとともに学びたいみことばは、先週の続きの詩篇ではなく、テモテへの手紙第一3章です。詩篇20篇の学びを楽しみにされていた方がおられるなら、すみません、詩篇はしばらくの間お休みになります。では、詩篇を離れて、今日からテモテへの手紙から皆さんと何を考えたいのか？それは「霊的リーダーについて」です。今日のタイトルにもあるように、私たちは今一度「霊的リーダーのあるべき姿」について、教会で仕えている長老、また執事と呼ばれる人たちがいったいどのような存在なのかについて時間を取って考えてみたいと思います。

でも、もしかすると、今、このことを聞いてこのように思われた方がいるかもしれません。これから霊的リーダーについて学ぶのですか？私には余り関係ないのではないか…？それよりも自分には今他に考えなければならない課題が山積みしていて、日々、いろんな問題に直面しているのです。だから、長老や執事について考えるというのは正直、自分にとって余り大きなことではないと思えます…と。

皆さんどう思われますか？もし、そのように考える方がおられるならまず覚えていてください。霊的リーダーというのは私たち一人ひとりの信仰生活にとってとても大切なものだということです。もっと言えば、皆さん少し思い出してください。私たちは以前「聖書が教える教会のあるべき姿」について見ました。特に、エペソ書4章からはっきりと私たちが目標とするべき「主の望まれる教会とはいったい何か」を見たわけです。私たちがその目標を目指して、神の家族として益々成長して神に喜ばれる教会としてあり続けようと望むなら、礼拝リーダーについて正しく知っていなければなりません。

【歴史的背景】

どうしてそのように言えるのでしょうか？それはパウロがこのテモテへの手紙を記した大きな目的の一つがそこにあったからです。まず、そのことを抑えるために、少し歴史的な背景というものの、特に、パウロとエペソの教会との関係を思い返してみてください。かつて、パウロは様々な地を巡って福音を宣べ伝え教会を建て上げていました。その道中で彼はエペソの町を訪れるのです。そして、その地において彼は約3年の間そこに滞在し、その場所でみことばを教え、そして、その働きによって教会が誕生したのです。さて、その後、パウロは彼らの元を去る日がやって来ます。3年間彼らに仕えたパウロは、彼らと別れるに際してエペソの教会の長老たちを呼んでこのようなことばを残しています。

そのことが、使徒の働き20：29-31に記されています。「：29 私が出発したあと、狂暴な狼があなたがたの中に入り込んで来て、群れを荒らし回ることを、私は知っています。：30 あなたがた自身の中からも、いろいろな曲がったことを語って、弟子たちを自分のほうに引き込もうとする者たちが起こるでしょう。：31 ですから、目をさましていなさい。私が三年の間、夜も昼も、涙とともにあなたがたひとりひとりを訓戒し続けて来たことを、思い出してください。」、パウロはエペソの兄弟姉妹のことを心から愛していました。だからこそ、自分が去った後で群れを荒らし回るような偽教師たちが現れるということ、そのことを分かっていたパウロは彼らに警告を与えたのです。兄弟たち、私がこの地を去った後必ず狂暴な狼がやって来ます。また、それだけでなく、教会の中からもいろんな誤りを語る者が現れます。だから、そんな人たちに気をつけてください。どうか私が教えたことをいつも思い出してくださいと。そんな警告を残して彼はエペソを去っていくのです。

パウロのエペソの教会に対する愛は変わりませんでした。だからこそ、彼はその地を去った後も今度はローマの獄中からエペソに手紙を送ったのです。それが前回私たちが見た「エペソ人への手紙」です。その時に私たちは学びましたが、その手紙を通してパウロは彼らに福音を繰り返し宣べ伝え、偽りに惑わされることなく、神の家族としてキリストの教会として一致していきなさいということをお訴えたのです。

さて、パウロはこれほどまでにエペソ教会の人たちを愛していました。この教会ほどパウロによって熱心に教えられた教会はなかったと言っても過言ではありません。でも皆さん、この教会がその後どうなったかご存じですか？この教会は主に喜ばれる教会として変わらず歩むことができたのでしょうか？悲しいことに、そうではありませんでした。パウロが別れ際に口にしたことばが現実のこととして起こったのです。エペソの教会は彼が警告した通りに、教会の外から、また内から聖書が教えていることに反する教えをする偽教師が入り込んでいたのです。そして、そんな間違っただけのリーダーたちによって教会は引き裂かれ人々の間に混乱が起こっていたのです。パウロはそのことを目の当たりにしました。そして、何をしたのか？もちろん、そのままでは良しとはしなかった。彼は愛する兄弟姉妹たちが苦しんでいるのを見たことによって、エペソの地にテモテを残して彼にその問題を解決させようとしたのです。そして、その際に送られた手紙がこの「テモテへの手紙」になるのです。

だから、皆さん、1章をご覧ください。1：3-4にこのように書かれています。「3 私がマケドニヤに出発するとき、あなたにお願いしたように、あなたは、エペソにずっととどまっていて、ある人たちが違った教えを説いたり、4 果てしのない空想話と系図とに心を奪われたりしないように命じてください。そのようなものは、論議を引き起こすだけで、信仰による神の救いのご計画の実現をもたらすものではありません。」と、ここにはっきりと記されていました。ある人たちが間違っただけの教えを説いていたのです。教会の中でリーダーと呼ばれる人たちが人々を間違っただけの方向へと導いていました。そして、彼らが人々を正しい方向に導くのではなく間違っただけの方向に導いたからこそ、本来一致するべき教会の中であって絶えず争いが起こっていたのです。そのことが同じIテモテ6章に記されています。6：3-5「3 違ったことを教え、私たちの主イエス・キリストの健全なことばと敬虔にかなう教えとに同意しない人がいるなら、4 その人は高慢になっており、何一つ悟らず、疑いをかけたり、ことばの争いをしたりする病気にかかっているのです。そこから、ねたみ、争い、そしり、悪意の疑りが生じ、5 また、知性が腐ってしまって真理を失った人々、すなわち敬虔を利得の手段と考えている人たちの間には、絶え間のない紛争が生じるのです。」、ですから、パウロはみことばに反するリーダーがどれほど教会に大きな影響を与えるのか、大きな問題をもたらすのかということがよく分かっていたからこそ、そのことをこの手紙を通して厳しく取り扱っているのです。

また、ここで起こっていた問題はこれだけではありませんでした。それ以外にもすべては見ることができませんが、その一つに、一部の裕福な女性たちが教会の中で男性を教えるリーダーとして振る舞っていたということがあって、パウロはそのことを指摘していました。だから、2：11-14にはこのように書かれています。「11 女は、静かにして、よく従う心をもって教えを受けなさい。12 私は、女が教えたり男を支配したりすることを許しません。ただ、静かにしていなさい。13 アダムが初めに造られ、次にエバが造られたからです。14 また、アダムは惑わされなかったが、女は惑わされてしまい、あやまちを犯しました。」と。ここで勘違いして欲しくないことは、パウロはここで女性を下に見ていたのではないということです。男性も女性も神の形として造られ、同じように価値のあるものとして価値のある存在として創造されたということ、そのことをよく分かっていたのです。

でも同時に、男性と女性の間には神が異なった役割を、それぞれにふさわしい役割をもって造られたということも覚えていました。ゆえに、13節からアダムとエバの例を用いてそのことを教えようとするのです。思い出してください。創世記に記されていることですが、神はアダムを最初に、そして、その後でエバを造りました。創造の初めから神はアダムをリーダーとして、そして、エバを助け手として造ったのです。これはどちらが優れているかどちらが劣っているかということではありません。男女の間には違った役割、違った責任があったのです。それが神が創造されたときのすばらしい計画でした。

でも、皆さんがよくご存じの通り、この関係は罪が入ったことによって壊れてしまいます。そのことが創世記3章に記されていますが、罪が入ったことでどうなったか？本来リーダーであるはずのアダムがその役割を果たしませんでした。エバから手渡された善悪の知識の木の実を「NO!」と言うこともなく、また、そのことについてエバに対して「あなたのやっていることは間違っていますよ」と言うこともなく、彼も同じように食べたわけです。また、エバもアダムのリーダーシップに従うべきでしたが、その役割を果たさずにサタンに誘惑されてその実を食べ、そして、アダムにそれを手渡したので

す。このことのポイントはどちらもそれぞれに与えられた役割を果たさなかったということです。

パウロはそのことを思い出してここで言うのです。「かつて神の創造の計画に逆らってアダムとエバはそれぞれに与えられた役割を果たしませんでした。そして、そのことが大きな問題をもたらしたのです。だから、そのようなことを教会の中では絶対に起こさないでください。」と。もちろん、教会において神は重要な役割を女性にも数多く与えています。他の女性や子どもを教えることもそうですし、また、この3章にも記されていますが、女性執事として仕えることや弟子訓練をするということも、女性の役割、責任として与えられています。でも、確実に言えることは、パウロは女性が男性を教えたり教会全体を導いていくこと、そのことを良しとはしていなかったということです。だからこそ、そのことについて触れた後で、彼は3章の中で教会全体を導いていく長老や牧師は男性の働きであること、教会にとってそれがふさわしいリーダーシップの姿であると、そのように教えていくのです。

皆さん、こうして最初にいろんなことを言いましたが、ポイントは「私たちの信仰生活において、特に、主に喜ばれる教会として成長し続けていくためには霊的リーダーが大切だ」ということです。そして、皆さん覚えておいてください。あれ程パウロによって教えられたエペソの教会も偽教師が入り込み、リーダーがみことばから離れてしまったことによって、様々な混乱が起きました。しかも、このことは何十年も経った後に起こったことではありませんでした。今日のレジメにも記しておきました。**パウロの最後のことば（AD56年）→エペソ人への手紙（AD年）→テモテへの手紙（AD65年）**

パウロがエペソ教会の長老たちに最後の挨拶をして、その後エペソ教会に手紙を書き送りました。そして、そのほんの数年後に教会の中に数多くの問題が発生していたのです。皆さん、私たちはエペソ人への手紙を通して教会について学びましたが、同じことが私たちには起こらないとは絶対に言えないのです。だからこそ、私たちは霊的リーダーがどんな存在なのかということを知り、いつもみことばによってその人が正しくリードしているのかどうかということを知ることが求められるのです。正しく吟味しようとするなら、何よりもまず聖書がリーダーに関して何を教えているのかを学ばなければいけません。そのことをパウロはこの3章で教えているのです。

さて、皆さんどうですか？最初よりは霊的リーダーについて学ぶことが自分にとって大事なことだと思えるようになったのでしょうか？もしかすると、まだ自分とは関係がないと感じている方もおられると思うので、これから3章の1節から16節まですべてを見ていきますが、このシリーズを通して次の四つの質問をいつも覚えていてください。

（1）このIテモテ3章は霊的リーダーだけでなく、すべてのクリスチャンが目指すべき霊的に成熟した者の基準が記されている

ここに書かれている様々なリストは特別な人にだけ与えられているものではありません。つまり、今の皆さんに与えられているものだということです。皆さんが霊的に成熟を目指していくのであればこの基準を目指して生きていかなければいけないのです。だからこそ、たとえ今リーダーでなかったとしてもまた、この先リーダーにならなかったとしても、私たちはこの基準を目指して成長していくことが求められます。だからこそ、これから数週間、数ヶ月かけて見ていきますが、今の自分の歩みと見比べてください。私たちはどんな点において主に喜ばれる者として成長しなければいけないのかということを知り、みことばを通してよく考えてみてください。

（2）この箇所は教会のリーダーである長老や執事と呼ばれる人物がどんな存在なのかということを知り、私たちにしっかりと教えてくれている

そのことはこの箇所から見る事ができるのです。だからこそ、ぜひ皆さん、これはお願いです。この基準を通して今教会に与えられている長老や執事のことを見守ってください。私たちに今与えられているリーダーたちがこの基準に沿って歩んでいるかということを知り、よく吟味してください。そして、ぜひ、その一人ひとりが続けて忠実に歩めるように祈りによって励ましてください。

（3）男性の皆さんに：ここに記されているこのリストは、私たち一人ひとりが目指していくべきリーダーの姿です。この姿をひとり一人が目指してください。ここには私たちが家庭において、また、

職場において、教会において目指していくべき姿を見て取ることができます。ですから、どうか霊的リーダーとしての役割、責任というものをここからよく学んで、そのみことばによってともに成長していきましょう。

(4) 女性の皆さん : 女性の皆さんにとってもこの箇所は非常に大切なものです。先にも言いましたが、まず、それぞれが自分の歩みをこのみことばに照らし合わせてみてください。また、それに加えて、もし結婚されているなら、ご自身の夫がこの箇所に書かれているような歩みをしているかどうか、そのことを吟味してみてください。あら探しをして非難することが目的ではありません。愛をもって、まずは一つでも二つでもいいですから、ここに記されている者として夫が成長できるように、リーダーとして成長できるように、愛をもって励ましてください。また、もし結婚していない方なら、ここに記されている男性の姿を追い求めてください。完璧にこの基準を満たしているような男性は存在しません。でも、これらの点において成長しようとしている、そんな人をどうか探し求めてください。それが聖書が教えているあるべき男性の姿です。

皆さんどうですか？ 私たちすべてにとってこれから見るみことばが大切であるとそう思うので、今日から I テモテ 3 章のみことばをともに見ていきたいと思えます。まず、1 節から 16 節を読みます。

「:1 「人がもし監督の職につきたいと思うなら、それはすばらしい仕事を求めることである」ということばは真実です。:2 ですから、監督はこういう人でなければなりません。すなわち、非難されるところがなく、ひとりの妻の夫であり、自分を制し、慎み深く、品位があり、よくもてなし、教える能力があり、:3 酒飲みでなく、暴力をふるわず、温和で、争わず、金銭に無欲で、:4 自分の家庭をよく治め、十分な威厳をもって子どもを従わせている人です。:5 ——自分自身の家庭を治めることを知らない人が、どうして神の教会の世話をすることができるでしょう——:6 また、信者になったばかりの人であってはいけません。高慢になって、悪魔と同じさばきを受けることにならないためです。:7 また、教会外の人々にも評判の良い人でなければいけません。そしりを受け、悪魔のわなに陥らないためです。:8 執事もまたこういう人でなければなりません。謹厳で、二枚舌を使わず、大酒飲みでなく、不正な利をむさぼらず、:9 きよい良心をもって信仰の奥義を保っている人です。:10 まず審査を受けさせなさい。そして、非難される点がなければ、執事の職につかせなさい。:11 婦人執事も、威厳があり、悪口を言わず、自分を制し、すべてに忠実な人でなければなりません。:12 執事は、ひとりの妻の夫であって、子どもと家庭をよく治める人でなければなりません。:13 というのは、執事の務めをりっぱに果たした人は、良い地歩を占め、また、キリスト・イエスを信じる信仰について強い確信を持つことができるからです。:14 私は、近いうちにあなたのところに行きたいと思いつつも、この手紙を書いています。:15 それは、たとえ私がおそくなった場合でも、神の家でどのように行動すべきかを、あなたが知っておくためです。神の家とは生ける神の教会のことであり、その教会は、真理の柱また土台です。:16 確かに偉大なのはこの敬虔の奥義です。「キリストは肉において現れ、霊において義と宣言され、御使いたちに見られ、諸国民の間に宣べ伝えられ、世界中で信じられ、栄光のうちに上げられた。」

さて、今日見るのは 1 節だけです。パウロはここで先ず、教会の霊的リーダー、特に、教会を監督する者がどのような人物なのか？そして、その人物が為す働きがどれほどすばらしいものかということをお私たちに教えてくれています。今日は特に皆さんとパウロが用いていた四つのことばに注意しながら、そのことを見ていきたいと思えます。

○霊的リーダー : 教会を監督するものについて

1. 「ということばは真実です」

日本語訳ではこのことばが文の最後に出て来ていますが、原文を見るとこのことばは最初に使われています。つまり、パウロは「このことばは真実です。人がもし監督の職につきたいなら…」と 3 章を始めているのです。皆さんちょっと考えてみてください。「ということばは真実です」とパウロは言ったのですが、これはどういうことでしょうか？パウロが発したことばはどれをとっても真実ですね。彼はいろんな手紙を書きましたが、その中に嘘や偽りを含めたと思いませんか？含めませんでした。では、パウロはいったいこの表現をどういう意味で用いたのでしょうか？確実に言えることは、この表現を用いてこれから話すことばは真実です。信頼できます。でも、それ以外のことばは信頼できるかどうか分かり

ませんと、そのようには言わなかったということです。

では、何を言わんとしたのでしょうか？それは自分が今から発しようとしていることばは何よりも重要だということです。何よりも重要だからこそよく注意して聞いてくださいと、このことば、この表現を用いることで彼は最大限強調しようとしたのです。これはすごく重要なことだと。実を言うと、この表現は新約聖書の中で5回しか用いられていません。ということは、パウロはこの表現を5回だけ用いて注意すべき注目すべき最も重要な教えを伝えていたのです。

では、どんな時に彼はこのことばを用いたのでしょうか？一つ一つ見ましょう。

I テモテ 4 : 8 - 9 「:8 肉体の鍛練もいくらかは有益ですが、今のいのちと未来のいのちが約束されている敬虔は、すべてに有益です。:9 このことばは、真実であり、そのまま受け入れるに値することばです。」

テトス 3 : 8 「これは信頼できることばですから、私は、あなたがこれらのことについて、確信をもって話すように願っています。それは、神を信じている人々が、良いわざに励むことを心がけるようになるためです。これらのことは良いことであって、人々に有益なことです。」、

皆さん、この二つを通して彼は何を言っていますか？それは救われた者たちが成熟を目指して良いわざに励むということ、それが有益なこと、非常に素晴らしいことだと教えたのです。

II テモテ 2 : 11 - 13 「:11 次のことばは信頼すべきことばです。「もし私たちが、彼とともに死んだのなら、彼とともに生きるようになる。:12 もし耐え忍んでいるなら、彼とともに治めるようになる。もし彼を否んだなら、彼もまた私たちを否まれる。:13 私たちは真実でなくても、彼は常に真実である。彼にはご自身を否むことができないからである。」

ここではどうでしょう？この箇所ではいろんなことが言えると思いますが、簡潔に言うなら、信仰者が忍耐をもって耐え忍ぶということ、主に忠実であり続けるということ、そのことが大切である、それは素晴らしいことだと教えたのです。そして、皆さんに最も注目してほしいのは次の箇所です。

I テモテ 1 : 15 「『キリスト・イエスは、罪人を救うためにこの世に来られた』ということばは、まことであり、そのまま受け入れるに値するものです。私はその罪人のかしらです。」、この箇所でパウロが教えたことは何でしょう？それはイエス・キリストは罪人を救うために来られたということ、つまり、福音を言っているのです。

パウロはこのリストと並んで I テモテ 3 : 1 を語ったのです。「人がもし監督の職につきたいと思うなら、それは素晴らしい仕事を求めることである」ということばは真実です。」と。よく考えてみてください。言うまでもなく、私たち一人ひとりにとってキリストの福音は大切なものです。私たちはかつて罪の中に死んでいました。生まれながらに私たちはみな御怒りを受けるべき者でした。そんな愚かでもうもなかった私たちを、主はあわれんで、恵みによって信仰によってキリストによって救い出してくださいました。私たちにはどうすることもできなかったその罪の問題を、主の十字架と復活のわざが解決してくれました。そのことを私たちが覚えるときに、これほどまでに私たちにとってすばらしく重要なものはないのです。でも、パウロはそんな重要な福音とここで教会のリーダーに関することとを同じことばを用いて扱っていたということです。彼にとって福音がとても重要であるように、霊的なリーダーも同じように重要なものであったのです。

今日の初めにも見たように、実はエペソの教会には様々な間違っただリーダーシップがはびこっていました。間違っただリーダーたちによって様々な問題が引き起こされていたのです。みことばから離れてしまったリーダーたちによって人々は混乱していました。だからこそ、そのことを覚えて彼は言うのです。これから言うことをよく注意して聞いてください。「よく聞きなさい」とテモテに対して言うのです。教会において霊的リーダーは非常に大切な存在です。そして、人がもし教会を監督するという働きを望むのであれば、それは何よりもすばらしく大切なこととす。

ここで少し考えてみてください。果たして、私たちはこのパウロと同じように教会のリーダーというものの重要性を捉えているのでしょうか？パウロには福音がとても重要であるように彼にとって霊的リーダーも非常に大切なものだったのです。もし、皆さんの中にそのことを自分のこととして余り考えて来なかったと言われる方がおられるなら、このシリーズを通していっしょに学んでいきましょう。パウロ

は「…ということばは真実です。」という表現を使って、霊的リーダーの重要性を教えてください。

2. 「監督」

二つ目に注目したいことばはここにある「監督」ということばです。「人がもし監督の…」と、この「監督」ということばは新約聖書を通して「長老」や「牧師」ということばと並んで使われていることを私たちは見て取ることができます。「監督」とは教会に起こっていることを隅々まで見渡し見守るといふ、そのような霊的なリーダーの働きを表しています。そこで皆さん、今日はここで今一度考えてほしいことがあります。それはこの監督、長老、牧師という存在が同じ一人の人物を指しているということです。このことは以前にも見ましたが、たとえば、1ペテロ5：1-2でペテロはこのように記しています。「1 そこで、私は、あなたがたのうちの長老たちに、同じく長老のひとり、キリストの苦難の証人、また、やがて現れる栄光にあずかる者として、お勧めします。2 あなたがたのうちにいる、神の羊の群れを、牧しなさい。強制されてするのではなく、神に従って、自分から進んでそれをなし、卑しい利得を求める心からではなく、心を込めてそれをしなさい。」と。ここで使われている「それをしなさい。」と訳されているこのことばは「監督する、世話をする」という意味があります。

ですから、この箇所には三つのことばを見ることができます。「長老たちに、」、「牧しなさい」、そして、「それをしなさい。」です。また、ペテロ書だけでなく使徒の働きにも同じことが書かれています。使徒20：17、28「17 パウロは、ミレトからエペソに使いを送って、教会の長老たちを呼んだ。…：28 あなたがたは自分自身と群れの全体とに気を配りなさい。聖霊は、神がご自身の血をもって買い取られた神の教会を牧させるために、あなたがたを群れの監督にお立てになったのです。」と、ここにも出ています。パウロはエペソ教会の長老たちに対して、あなたがたは神の羊、神の教会に属する人たちを牧する牧師としての責任を持っている群れの監督として立てられたのですよと。

ですから、これらの箇所からはっきりと見て取れることは、牧師と長老と監督というのは三つの異なる人物のことを指しているのではなく、同じ一人の人物の働きを指している、同じ一人の人物を表しているということです。ですから言い換えると、教会にあって、すべての長老は牧師であり、すべての牧師は監督であり、すべての監督は長老だということです。

皆さん、ちょっとここで止まっていたいただいて、このことはとても大切なことです。みことばは「牧師」「長老」また「監督」との間に順位や優劣をつけていません。これらに区別もつけていません。もしかすると、皆さんの中には今このようなイメージを持っておられる方がいるかもしれません。教会にあっては牧師と呼ばれる人の立場が一番上で、その下に長老たちがいる。長老と言われる人は牧師をサポートする立場であると。実際に、今私たちの教会の週報を見ると、これまで使われて来た「牧師」に代わって「長老」ということばが私（近藤崇志）にも使われています。それを見て「どうして牧師でなく長老になっているのだろう？」と思われたかもしれません。「まあ、歳も若いから牧師から長老に格下げになったのか…」と思った方もおられるかもしれません。

皆さん、覚えてほしいことは、私たちがなぜそのようにしているのか？ということです。それは今私たちが見てきた通り、みことばを見るなら牧師も長老も監督も同じ一人の人物として描かれているからです。私たちがそのように見るからです。ですから、教会はたった一人のリーダー、一人の主任牧師によって働きのすべてが決められているところではありません。そうではなく、また来週から見えていきますが、この3章に記されている長老の資格を満たした霊的に成熟した複数の長老たちによって、複数の長老たちが一致することによって群れを導き、教会を導いていくのです。それが聖書が教えている教会のリーダーシップの姿だと私たちを信じるからこそ、そのようにしているのです。皆さんに理解していただきたいことは、浜寺聖書教会は今私を含めて四人の長老がいます。この一人ひとりが皆さんにとっての牧師であり監督だということです。教会はそのようなリーダーシップのもとで成長していこうとします。パウロはこのことをよく分かっていました。だからこそ、パウロは教会には長老と呼ばれる群れを牧し監督する責任を負ったリーダーが必要だということを繰り返して述べます。ここでもそのことを見て取ることができます。

3. 「つきたいと思うなら」、「求めることである」

次に注目したいのは二つの動詞です。「つきたいと思うなら」、「求めることである」です。

「つきたいと思うなら」：これは「何かをつかもうと手を伸ばす、目標を達成できるように奮闘する」という意味があります。皆さん 一番を目指して走っているそのランナーの姿を想像してみてください。彼はただ一つのことに集中しています。走っている時にいろんなところをキョロキョロしません。彼は必死になってゴールするその瞬間だけを見据えて走っています。なぜなら、勝ちたいから、一番の座を手に入れたいからです。それが彼の目標であって、心の中はそのことでいっぱいになっているのです。そこだけを目指しているのです。この「つきたいと思う」ということにはそのような意味があります。「何かを手にした」とそれほどまでに強く願うことです。

また、それに伴って生じる行動を表すのです。何かをしたい、何かを手に入れたいと思って手を伸ばすのです。

「求めることである」：このことばも「つきたいと思う」の意味に似ていますが、これには「何かを手にするを強く願う、何かに心を留める」という意味があります。先に見たのは何かをしたいと思って行動に出るのですが、「求めること」は「強く願う」という心の内側のこと、その動機を強調しています。ですから、行動に現れなくても、心の底で「そのものを手に入れたい」という思いをもっている状態です。

ですから、パウロがここで何を言わんとしたのか？それは人がもし教会の長老、牧師、監督として仕えたいと、その願いを心のうちで強く持っているということは、どんなものよりも素晴らしいことだ、それを願うこと、それを望むことはとても立派な願いであると、そのことをここで教えているのです。もちろん、独りよがりな思いを持って自分の欲や利益のため、また、人に認められたいからとか人の上に立ちたいからという思いを良しとしているわけではありません。「リーダーになりたい！」と、でも、その中に心の思いが自分のために…であってはならないのです。聖書は繰り返して、私たちは仕えられる者ではなく、自ら喜んで人に仕える者であることを求めています。

仕えられることよりも仕えることが求められている、そのことをペテロも教えています。I ペテロ 5：2に「あなたがたのうちにいる、神の羊の群れを、牧しなさい。強制されてするのではなく、神に従って、自分から進んでそれをなし、卑しい利得を求める心からではなく、心を込めてそれをしなさい。」と書かれている通りです。ですから、そのようなものを強く願ったとしても、そもそもの動機が間違っているはいけません。また、願いを持っていたとしてもその歩みがいつも主に逆らうものであってもいけません。どういうことか？私はリーダーになりたいと強く願ったとしても、その日々の歩みが主に喜ばれることを全然考えていないのであれば、それは間違っているということです。もし、霊的リーダーになりたいという願いを自分の心に思ったなら、自分の動機がどこにあるのかということ、なぜそれを願っているのかということ、それを吟味すること、それが私たちにとって大切です。

でも、パウロが言うことは、何よりも主と人のために自分のすべてをささげて、すべてを犠牲にしても仕えたいと、もし、そのような思いが心のうちに与えられているのなら、それは喜ばしいこと、素晴らしいことだということです。なぜ、それが素晴らしいのでしょうか？パウロはなぜそのことを強く願うことが素晴らしいと思っていたのでしょうか？それは、この当時教会のリーダーになるということは簡単なことではなかったからです。牧師になること、教会のリーダーになるということ、監督や長老になるということには大きな難しさや犠牲が伴うものだったからです。教会は貧しかったゆえに、財政的にも苦しくて快適さや安定した生活など望み得ないことでした。また、この当時のクリスチャンたちは様々な迫害を受けていましたから、その群れのリーダーであるということは敵からの迫害の真っ先の標的にされるということです。ですから、いのちが危険にさらされることもあったのです。

また、そのような外的な問題だけでなく、リーダーも自分自身の罪と向き合わなければいけないし、教会にあって仕えるひとり一人の抱える罪の問題とも向き合わなければいけないわけです。それに加えて、サタンの誘惑や戦いも経験しなければなりません。ですから、教会のリーダーとなるということは非常に難しかった、厳しかったのです。だからこそ、パウロは言います。もし、そのような困難や苦し

みがあることをよく分かっていて覚えていてもなお、教会のリーダーとして仕えていきたい、働いていきたいと願うなら、それを追い求めようとするなら、それはすばらしい価値のあることだと。

これはもちろん、教会にいる全員が、特に、男性のすべてが長老になるということではありません。でも、言われていることは、私たちが主のために仕えたいという願いが与えられるようにと祈り、その働きにつくことを心から求めることが大切だということです。どうでしょう？私たちは自分の人生をすべて犠牲にしても主と人に仕えたいと、そのような願いを持っているのでしょうか？そのような教会のリーダーになりたいと思っているのでしょうか？もし、思っているならよく考えてみることです。自分の心を吟味してみてください。自分に声を掛けてみてください。自分の動機というものが神の栄光を現したい、人の益になりたいと、そのことを何よりも望んでいるかどうか？それとも、自分自身がよく見られたいからと、自分自身のことに関心を置いてそのことを願っているのか？です。パウロは教会のリーダーとして仕えたいという願いを持つこと、それはすばらしいことだと教えました。

4. すばらしい仕事

そして最後にもう一つ、注目したいことばは「すばらしい仕事」ということばです。ここで皆さん、1節で言われていることをもう一度よく思い返してみてください。パウロはこのように言っていました。「人がもし監督の職につきたいと思うなら、それはすばらしい仕事を求めることである」ということばは**真実**です。」と。ここで注意すべき点は、パウロは「監督の職につきたいと望むこと、それはすばらしい仕事を求めることだ」と言っているということです。言い換えるなら、彼はここで役職や立場、肩書というものに触れているのではなく、「実際の働き」について言及しているということです。リーダーの肩書が欲しい！ではなく、リーダーの働きをしたいと望むこと、それはすばらしい仕事を求めることだと言うのです。だから大切なことは、どんな立場の人間になるのかということ望むのではなく、どんな働きをするのかを望むということです。

私たちがパウロの時代を見ても今の時代を見ても、教会のリーダーというのは仕えることに難しさがつきまといまいます。教会の中には様々な羊がいるわけです。弱っている羊もいれば迷っている羊もいます。傷ついている羊もいれば反抗的な羊もいたりします。羊飼いはそんな一匹一匹に愛を持って向き合い続けることが求められるのです。そこには当然大きな犠牲が伴います。難しさがあります。でも同時に、それを通して群れの一人ひとりをよく知って、喜びをともに分かち合うことができます。みことばを愛する者として神のすばらしさを覚えていっしょに賛美することもできます。また何よりも、失われていたたましいが救われる瞬間を見ることが真っ先にできるのです。

そして、それに加えて、みことばは忠実に働いた者には神からの祝福があることも教えています。そのことはIペテロ5：4に書かれています。長老たちについて語ってきた後にこのように告げます「そうすれば、大牧者が現れるときに、あなたがたは、しばむことのない栄光の冠を受けるのです。」と。長老たちは栄光の冠を受けるのです。確かに難しいけれど、このようなすばらしい特権がある。すばらしい祝福が約束されている。だからこそ、このような働きを求めるということは私たちがすばらしい仕事を求めることだと、パウロはそのように教えていたのです。

どうでしょう？特に男性の皆さん、このような教会の長老として仕えていきたいとそのような願いを今持っておられるのでしょうか？みことばは教えてくれています。それは「すばらしい仕事を求めることだ」、すばらしいこと、一人ひとりにとって最高のものだと。それなら、今それを熱心に皆さんが求めているかということです。考えてみてください。私たちはどのような証を周りの人たちに立てているでしょう？もしかすると、皆さんは福音に熱心な姿を周りに証しているかもしれませぬ。それはすばらしいことです。主に救われて新しく造り変えられた者として、良いわざに励む姿を皆さんは証として立てているかもしれませぬ。それもすばらしいことです。

では皆さん、霊的なリーダーを目指して霊的な成熟を目指して、そのリーダーになることを熱心に求めている姿を私たちは証として立てているのでしょうか？パウロはそのことが福音や良いわざを求めるといふことと同じくらい重要なものだと教えたのです。そのことを私たちは求めているのでしょうか？もし

かすると、これまで話を聞いて来て、こんなことを思われた方がいるかもしれません。自分にはそんな覚悟はありませんとか、霊的リーダーになる資格は私にはありませんとか、自分のように足りない者には到底高すぎる壁ですと。そのように考えて、男性の皆さん、長老として仕えること、また、女性の皆さんには執事かもしれません。そのようにリーダーになることをためらっている方がおられるかもしれません。もし、そのようなことを感じるのであれば、この手紙を記したパウロの姿を思い返すことです。彼自身、自分のうちに力があるとは一切考えていませんでした。

Ⅱコリント2：16でこのように言っています。「ある人たちにとっては、死から出て死に至らせるかおりであり、ある人たちにとっては、いのちから出ていのちに至らせるかおりです。このような務めにふさわしい者は、いったいだれでしょう。」と。パウロは自分には主に仕え、主の救いを宣べ伝えるという務めはとて務まらない、その務めに自分は値しないと、そのことをよく分かっていました。でも、そんな彼が続けてこのように言います。Ⅱコリント3：5-6「:5 何事かを自分のしたことと考える資格が私たち自身にあるというわけではありません。私たちの資格は神からのものです。:6 神は私たちに、新しい契約に仕える者となる資格を下さいました。…」と。パウロは自分ではなく神が自分にその資格を与えてくださったのだと言いました。神が自分のような足りない者を励まし支えてくださっていると、そのように告白したのです。彼は自分の知恵や力によって主のため人のために仕えようとしていたのではありませんでした。彼は自分に十分な力を与えることができる神に信頼したのです。

私たちも同じです。私たちのうちには霊的リーダーにふさわしい知恵や力はいつまで経ってもありません。このことは今この教会で仕えている長老の方々に聞いてくださっても、皆さん同じように答えると思います。私たちは全く完璧な者ではありません。失敗も数多くあります。恐らく、皆さんが長老のひとり一人に聞けばこう言うと思います。「自分は主の働きのために不十分な存在です」と。その通りです。私たちは不十分です。でも同時に、このようにも言うでしょう。「神に仕え皆さん一人ひとりに仕えるということは、何にも優るすばらしい仕事です。すばらしい特権です。」と。

私自身もそうです。みことばを準備してIテモテを自分も学んでいきました。すると、ここを学べば学ぶほど、神が求めている基準が高いこと、その基準の高さが見えるほどに自分自身が恐ろしくなりました。本来、このような立場につくことには不十分な者であると自分自身も思いました。自分自身の罪深さというものがよく見えました。まだまだ成長していかなければいけないとそのことをはっきりと見せられました。でも同時に、まだ数年しか働きをしていませんが、神がご自身の血をもって買い取られた皆さん一人ひとりに仕えることができるということを、私自身はとて神に感謝しています。すばらしい働きだと思えます。そのようにすばらしい働きを追い求めることです。特に男性の皆さん、男性はリーダーとして神から役割を与えられています。そのことを求めることはすばらしいことだと教えられています。ですから、そのことを祈り求めてください。

〇まとめ : 今日は皆さんと一っしょにIテモテ3章から「霊的リーダーとは何か」ということを学び始めました。これはイントロと言えるかもしれません。これから私たちはいろいろな資格というもの、いろいろな品性というものを見ていきます。様々なリストを見ていきます。ですから、これらを学んでいく数ヶ月の間、皆さん何度もこの箇所を読んでください。この箇所を通して主がどのようなことを一人ひとりに教えようとされているのかということをよく見てください。

パウロは霊的リーダーが教会にとって大切だということを教えています。彼はそのことをよく分かっていました。私たち一人ひとりにとってもそれは大切です。ですから、続けてこの手紙を学んで主に喜ばれる者として、教会としても成長していきましょう。